

まえがき

情報社会を支えるものは何か。

歴史をひもとけば、西洋ではマルティン・ルターによる万人司祭主義の思想から個人の独立を駆り立てる動きが始まっている。この宗教改革が、宗教社会の復権をめざしていたルター自身の思惑をも破って、近代民主主義へと拡大した背景には、情報メディアという観点からも期を画する動きがあったことを忘れてはなるまい。すなわち、ルターが、知識階級しか読めないラテン語の聖書を、民衆が読むことのできるドイツ語に訳した、ということが一つ。もう一つは、それがグーテンベルクの印刷革命によって、多くの人々の手にすみやかに行き渡ったということである。これが現代に連なる歴史上で最初の情報革命だったと言ってよいだろう。その後、政治などの時事問題を速報する「新聞」という情報メディアが普及し、学術研究の成果を迅速に公開するための「学術雑誌」という情報メディアが学界で権威を持つようになる。これらの紙媒体の図書、新聞、雑誌は、時の権力者による言論統制と戦いながら各種の思想や意見を伝えてきた。さらに、テレビという情報メディアが登場してからは人々の生活の中心がそこへ吸い寄せられていく。テレビの速報性と情報量は紙媒体の情報メディアをはるかにしのぐもので、テレビの普及をもって「情報社会の到来」と呼ぶ立場もある。そして現在、インターネットの登場、モバイル端末の普及、電子書籍の広がり。こうした段階まで情報社会が進展しつつある。

このような情報社会の発展史を通じて、それを支えてきたものは何であったかと考えると、テレビの普及という段階までは、やはり紙媒体の情報メディアであり、それを物理的に提供する社会的な組織が、出版社や新聞社であり、さらには書店、そして図書館であった。図書館は、紙媒体の情報メディアを人々が利用するための拠点として、歴史上、長い間、その役割を担ってきた。しかしテレビの普及以後、その役割は徐々にではあるが、根本的な変化を迫られてきたといつてよい。日本の図書館は、その変化の要請に対応してきたであろうか。ことに、情報社会における図書館サービスはいかなる方向へ向かうべきであるか。専門職の図書館司書には、どのような情報技術の習得を求めるべきであるか。また、現在、情報社会を支える根本的な思想でもある言論の自由、表現の自由、報道の自由などの「情報の自由」はすべて無条件に良いものと考えられがちであるが、本当にそうだろうか。人々を苦しめるような不自由な言論統制が一方の極端だとすれば、無軌道な情報の自由を求めることもまた、他方の極端で、別の問題を含むのではないだろうか。また、従来のマスメディア論はいかに批判ないし再評価されるべきであろうか。今号ではこうした問題意識に取り組んだ論考を採録した。

情報社会は日進月歩だが、その本質はおそらく人間社会の本質そのものであろう。情報社会の特徴をとらえながらも、普遍的な人間社会を深く洞察するという原点を忘れず、本論集をそうした研究発表の場として活用して頂ければ幸いである。

2011年3月31日

竹之内 禎